

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 15 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381221

研究課題名(和文) 批判的教科書活用論に基づく社会科授業開発研究

研究課題名(英文) The Study of Developing Social Studies Lessons by Critical Textbook Usage Method

研究代表者

藤瀬 泰司 (Fujise, Taiji)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：30515599

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教科書記述が中立公平な絶対的真理ではないことを生徒に理解させる批判的教科書活用論に基づく社会科授業開発研究である。研究成果は次の5つ。

1つ目は、批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業を開発し実践したこと。2つ目は、批判的教科書活用論に基づく授業モデルの効果を具体的に示したこと。3つ目は、批判的教科書活用論を教育実習の指導理論として活用したこと。4つ目は、反省的实践家を育てる教育実習プログラムの開発に取り組んだこと。5つ目は、子どもの批判に開かれた授業検討方法を構築したこと。

研究成果の概要(英文)：This study is developing social studies Lessons by Critical Textbook Usage Method, which assist students to understand social studies textbooks do not represent the neutral and absolute truth. The result of this study is as follows:
First, we developed and conducted five lessons by Critical Textbook Usage Method. Second, we researched the effects of the five lessons concretely. Third, we used Critical Textbook Usage Method as the theory of teaching student teachers. Fourth, we tried to develop the educational programs for bringing up student teachers as reflective practitioners. Fifth, we developed the method of improving social studies classes through using class evaluation by children.

研究分野：教科教育学(社会科)

キーワード：教科書 社会科 中学校 授業開発 教育実習 授業評価

1. 研究開始当初の背景

(1) 教養主義に基づく我が国の社会科では、教科書記述を誰に対しても中立で公平な絶対的真理として学習させる授業が作られやすい。しかしながら、このような授業作りでは、民主的な国家・社会の形成者を育成することは難しい。なぜなら、一著作物にすぎない教科書記述を中立公平な絶対的真理として教えることは、権威や常識に盲従する国家・社会の順応者を育成してしまうからである。教養主義の授業作りでは、国家・社会の順応者は育成できて国家・社会の形成者は育成できないわけである。

(2) こうした授業作りの課題を克服するために、我が国の社会科教育研究は、教育内容開発研究という授業作りの方法を提起してきた。教育内容開発研究とは、教養主義に代わる理論を構築して授業の目標・内容・方法を再構成する授業作りの方法である。社会科学科や社会問題科の授業開発研究が典型的である。我が国の社会科教育研究は、教育内容開発研究の方法を提起して、権威や常識に盲従しない国家・社会の形成者を育成する社会科授業の具体像を提示してきたわけである。

(3) しかしながら、教育内容開発研究の手法は、一部の研究熱心な教師にしか支持されていないのではないだろうか。なぜなら、教科書の使用義務がある我が国の学校教育、とりわけ教科書が無償給与される小中学校の教育現場では、ほとんどの教師は、教科書だけに頼らない教育内容開発研究よりも、教科書を教育内容にして指導方法だけを改善する教材開発研究の方法に基づいて授業を作っていると考えられるからである。その結果、教科書記述を中立公平な絶対的真理として学習させる授業が一向に少なくならず、国家・社会の順応者を育成してしまうという課題がいつまでも再生産されてしまう。

(4) したがって、教科書の使用義務があるという状況の下で教育内容開発研究の普及・拡大を図ろうとすれば、教材開発研究に代わる教科書活用法を提起することによって、教科書を教育内容にするだけでは市民育成が難しいことを教師に自覚させる必要がある。そうすれば、教科書とは異なる教育内容を開発して市民育成を図る教育内容開発研究の必要性を理解できるため、それに取り組む教師文化が次第に醸成されよう。教科書の使用義務があるという状況に加えて、授業経験の乏しい若手教員が急増している我が国の現状では、教材開発研究に代わる教科書活用法を提起しない限り、教育内容開発研究に取り組む教師文化を醸成することは極めて難しいわけである。

2. 研究の目的

(1) それでは、どのような教科書活用法を提

起すれば、教師は、教科書を教育内容にするだけでは民主的な国家・社会の形成者の育成が難しいことを自覚できるのだろうか。本研究では、この問いに答えるために、批判的教科書活用論という教科書活用法を提唱したい。批判的教科書活用論とは、教科書記述が多様な解釈の一つに過ぎない相対的真理であることや不公正な社会の現実の生産と変革に関わる政治的实践であることを学習させることによって、教科書が中立公平な絶対的真理ではないことを子どもに理解させる授業作りの方法である。そのため、この方法に基づいて授業を開発すれば、教科書だけに依らない教育内容開発の必要性を実感できるため、教科書を教育内容にするだけでは、それを中立公平な絶対的真理として教えることしかできず、国家・社会の順応者は育成できて国家・社会の形成者は育成できないことをよりよく自覚できよう。

3. 研究の方法

(1) 大学院生の授業開発指導を通して、批判的教科書活用論に基づく社会科授業作りの方法を精緻化すること。批判的教科書活用論とは、教科書紙面の小見出し間や段落間の関係を分析して執筆者の解釈を予想する、教科書の本文と資料に関する問いを作りその答えを調べて予想した解釈の妥当性を検討する、執筆者の解釈に基づいて学習課題とその回答を準備し授業目標を仮設する、学習課題とその回答の認知的論理的妥当性を検討して仮設した授業目標の適否を判断する、批判的教科書活用論の学習過程(教科書解釈を予想・探求・吟味する学習過程)に即して主な発問とその答えを配列し授業のアウトラインを構想する、という5つの段階を踏まえて授業を作ることである。これら5つの段階を踏まえて大学院生の授業開発指導を行うことによって、これら5つの段階が妥当かどうか検討するとともに、教養主義とは異なる教科書の活用方法を大学院生に習得させる。

(2) 附属学校と連携して、批判的教科書活用論を教育実習の指導理論として活用すること。研究代表者が所属する熊本大学教育学部は、3年次と4年次に附属中学校で教育実習を行うシステムを採用している。そこで、附属中学校の社会科担当教員と連携して、批判的教科書活用論を教育実習の指導理論として活用して、教育実習生の授業作り指導を実施する。そうすることによって、教育実習における授業作り指導のよりよいあり方を模索するとともに、教科書記述を中立公平な絶対的真理として読み解くのではなく、その記述を執筆者の解釈として読み解き授業を作ることができる授業作りの方法を学部生に習得させる。以上のように、批判的教科書活用論を活用して大学院生や学部生の授業開発指導を行うことによって、教科書を教育内

容にするだけでは、民主的な国家・社会の形成者を育成することが難しいことを自覚できる教員の基礎を培う。

4. 研究成果

(1) 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業モデルを開発し実践したことである。具体的には、大学院科目「社会科教育学実践特論」の受講者9名に対して、批判的教科書活用論に基づく授業作りの方法を指導し、「ヨーロッパのアジア侵略」「産業革命と欧米諸国」「キリスト教世界とルネサンス」「ヨーロッパと外の世界」「ヨーロッパ人との出会い」という5つの授業モデルを開発した。そして、これら5つの授業モデルは、熊本大学教育学部附属中学校において、上記9名により実践された。授業モデルを開発するだけでなく、実際に授業を実施したところに、従来の研究(引用文献)とは異なる本研究の成果がある。

(2) 批判的教科書活用論の効果を具体的に示したことである。上記5つの授業モデルの実験授業を実施する際、その効果を測定するために、実験授業に参加した中学生に対するアンケート調査を作成し実施した。調査の結果、批判的教科書活用論は、中学生の教科書観を次の3つの側面に変容させることができることが明らかになった。1つ目は、教科書の本文を出来事の網羅的記述とみなす網羅的文章観を変革できること。批判的教科書活用論は、教科書記述だけでなく、それとは異なる文献に基づいて授業内容を構成する方法であるため、教科書の本文を出来事の選択的記述とみなす選択的文章観に生徒の教科書観を変容させることができることを明らかにした。2つ目は、教科書掲載の資料を本文や紙面の飾りとみなす装飾的資料観を変革できること。批判的教科書活用論は、教科書掲載の資料に対して「見る/読む」と分かる発問だけでなく、「見る/読む」だけでは分からない発問を組み込んで授業を構成する方法であるため、教科書掲載の資料を課題の回答に役立つ契機とみなす実用的資料観に生徒の教科書観を変容させることができることを明らかにした。3つ目は、教科書の紙面を本文と資料の無秩序な寄せ集めとみなす羅列的紙面観を変革できること。批判的教科書活用論は、教科書記述の見出し間や段落間の関係性を読み解かせる授業を構成する方法であるため、教科書の紙面を本文と資料の秩序ある組み合わせとみなす合理的紙面観に生徒の教科書観を変容させることができることを明らかにした。以上のように、批判的教科書活用論の効果を測定するアンケート調査を作成・実施することによって、中学生が網羅的本文観・装飾的資料観・網羅的紙面観という教科書観を有していることが明らかになるとともに、批判的教科書活用論に基づく社会科授業を通して、選択的本文

観・実用的資料観・合理的紙面観に変革できることを明らかにした。

(3) 批判的教科書活用論を教育実習の指導理論として活用したことである。熊本大学教育学部附属中学校の社会科担当教員2名と連携し、2015年度及び2016年度の3年次・4年次教育実習の指導理論として活用した。具体的には、次の3つの段階を踏まえて活用した。第1段階は、批判的教科書活用論に関する理解を深める段階である。研究代表者が同理論に関する基本論文を上記担当教員2名に配布し説明した。第2段階は、授業作りの指導方針を協議・決定する段階である。研究代表者と上記担当教員2名は、教育実習で学生に分担させる各教科書ページを熟読して、学習課題とその回答を組み立てた。そして、研究代表者と上記担当教員は、教科書の読みやそれぞれが立てた学習課題とその回答について意見交換を図り、各実習生の授業作りについて指導方針を決定した。第3段階は、上記担当教員が学生の授業作りを指導する段階である。上記担当教員は、学生が立てた学習課題とその回答を分析して彼らの教科書理解の深さを読み取り、授業作りを指導した。批判的教科書活用論は、他の社会科授業理論とは異なり、教科書記述を徹底的に活用する授業作りの理論である。そのため、批判的教科書活用論は、単に社会科授業理論として機能するだけでなく、教科書を頻繁に使用させて実習生に授業を作らせることが多い教育実習の指導理論として活用できる可能性があることを明らかにした。

(4) 反省的实践家を育てる教育実習プログラムの開発に取り組んだことである。反省的实践家とは、教科目標に照らして「行為の中の省察(reflection in action)」(引用文献)を繰り返すことができる教師のことである。しかしながら、従来の教育実習では、反省的实践家というよりも、技術的熟達者を育てることが目指されることが多かった。なぜなら、社会科の場合、教育実習では教科書を活用して授業を作られることが多いため、「教科書記述をいかにうまく教えるか」ということに実習生が囚われてしまい、教科書を教えることが目的視されがちであったからである。それに対して、本研究では、批判的教科書活用論を教育実習の指導理論として活用したことによって、反省的实践家を育てる教育実習プログラムを開発することに取り組むことができた。なぜなら、この理論は、教科書を教えることを、目的そのものではなく、あくまでも民主的な国家・社会の形成者を育成するための手段として捉える授業理論であるからである。そのため、この理論を教育実習に導入すると、社会科授業を通して民主的な国家・社会の形成者を育成できているかどうかを意識することが重要であるということを実習生に自覚させることができる。以上の

ような考え方のもと、「教科書で民主主義の担い手を育てる授業作りを指導する」「民主主義の担い手を育てる指導技術を指導する」「教科目標の達成状況に照らして授業実践を反省させる」という3つの指導方針に基づく実習プログラムを開発し実施した。その結果、教育実習を通して、民主主義の担い手を育てるといふ教科目標を意識して授業作りや学習指導のあり方を反省することが重要であるということに気づいた学生が見られるようになった。

(5)子どもの授業評価を活用した社会科授業改善の方法という新しい授業検討方法を提起し開発したことである。批判的教科書活用論の効果を検討するにあたっては、研究成果(2)で述べた通り、実験授業を行った後に、「大学院生の授業を受けて、教科書に対するイメージは変わりましたか」等の項目を作成してアンケート調査を実施し、その結果を研究代表者が分析するという手法を通して行った。このような授業検討方法は、社会科教育研究の分野ではよく見られる研究手法である。しかしながら、批判的教科書活用論の目的が民主的な国家・社会の形成者の育成にあるならば、教師がアンケート調査を実施してその結果を分析するという手法だけでは不十分なのではないだろうか。なぜなら、このような研究手法だけでは、授業の重要なステークホルダーである生徒は、授業に対する意見表明権を有しているにもかかわらず、それを行使させることができないからである。民主的な国家・社会の形成者をよりよく育成しようとするならば、生徒を実験授業の対象者として位置づけるだけでなく、実験授業の批評者として位置づける研究方法を開発する必要があるわけである。そこで、本研究では、子どもの授業評価を活用して社会科授業を改善するという研究方法を提起した。ここでいう子どもの授業評価とは、教科目標に照らして社会科を定義し、その定義を視点にして子どもに授業を評価させるという評価方法である。そのため、この方法に基づいて授業評価を計画し実施すれば、子どもは社会科の定義に照らして授業に対する意見を述べることができるため、教師はその意見を参考にして授業の改善をよりよく図ることができる。以上のような考え方に基づいて、中学校公民単元「性同一性障害を考える」の授業を開発・実施・評価することによって、子どもの批判に開かれた授業検討法のあり方を明らかにした。本研究では、批判的教科書活用論の効果を測定した方法の限界・問題を吟味検討することによって、子どもの批判に開かれた形で、様々な社会科授業を検討する方法を開発し具体的に提起した。

引用文献

藤瀬 泰司, 批判的教科書活用論に基づく社会科授業作りの方法-教育内容開発研究

に取り組む教師文化の醸成-社会科研究, 第80号, 2014年, 21-32

ドナルド・A・ショーン(佐藤 学・秋田喜代美訳), 専門家の智慧-反省的実践家は行為しながら考える-, ゆみ出版, 2001

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

藤瀬 泰司, 子どもの授業評価を活用した社会科授業改善の方法-子どもに開かれた授業検討方法の構築をめざして-, 社会系教科教育研究, 査読有, 第28号, 2016, 61-70

藤瀬 泰司, 安部 統己, 中村 俊樹, 米満昇平, 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発(3)-民主的な国家・社会の形成者を育成するために-, 熊本大学教育学部紀要, 査読無, 第65号, 2016, 41-53

藤瀬 泰司, 青木 秀憲, 内田 開, 古賀 亮寛, 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発(2)-「ヨーロッパのアジア侵略」の場合-, 熊本大学教育実践研究, 査読無, 第32号, 2015, 89-98

藤瀬 泰司, 嘉村 潔高, 佐藤 慶明, 源 洋子, 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発(1)-「産業革命と欧米諸国」の場合-, 熊本大学教育実践研究, 査読無第32号, 2015, 77-88

〔学会発表〕(計6件)

藤瀬 泰司, 安部 統己, 中村 俊樹, 米満昇平, 批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発-大学院科目「社会科教育学実践特論」を事例にして-, 熊本県社会科教育学会第11回研究大会(於熊本大学), 2016年12月4日

藤瀬 泰司, 小田 修平, 坂田 秀一, 社会科教師としての自覚を育てる中学校教育実習指導の方法-反省的実践家の育成をめざして-, 日本社会科教育学会第66回全国研究大会(於弘前大学), 2016年11月6日

藤瀬 泰司, 子どもの授業評価を活用する授業理論検討方法の開発-授業開発研究の実証性を高めるために-, 社会系教科教育学会第27回研究発表大会(於鳴門教育大学), 2016年2月20日

藤瀬 泰司, 小田 修平, 坂田 修平, 反省的実践家の育成をめざす教育実習指導の

方法，日本社会科教育学会第 65 回全国研究大会（於宮城教育大学），2015 年 11 月 8 日

藤瀬 泰司，青木 秀憲，内田 開，批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発（2） - 「ヨーロッパのアジア侵略」の場合 - ，全国社会科教育学会第 63 回研究発表大会，2014 年 11 月 1 日

藤瀬 泰司，嘉村 潔高，源 洋子，批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発（1） - 「産業革命と欧米諸国」の場合 - ，全国社会科教育学会第 63 回研究発表大会，2014 年 11 月 1 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤瀬 泰司 (FUJISE, Taiji)
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：3 0 5 1 5 5 9 9

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

青木 秀憲 (AOKI, Hidenori)

安部 統己 (ABE, Noriki)

内田 開 (UCHIDA, Kai)

小田 修平 (ODA, Shuuhei)

嘉村 潔高 (KAMURA, Kiyotaka)

古賀 亮寛 (KOGA, Akihiro)

坂田 秀一 (SAKATA, Shuuichi)

佐藤 慶明 (SATO, Yoshihiro)

中村 俊樹 (NAKAMURA, Toshiki)

源 洋子 (MINAMOTO, Yoko)

米満 昇平 (YONEMITSU, Shouhei)